

三島由紀夫少年詩

小川和佑

潮出版社



116

三島由紀夫少年詩

昭和四十八年九月二十五日 第一刷
昭和四十八年十二月十五日 第二刷

定価 九〇〇円

著者 小川和佑

発行者 島津矩久

発行所 株式会社潮出版社

東京都新宿区南元町一四十一
電話東京(03)371-7111(代)
振替東京六一〇九〇番

郵便番号一六〇

(乱丁・落丁本はお取り替えます)

三島由紀夫少年詩／目次

ことばの目覚め——出発 7

神話の記憶 22

海のころ 27

剣と夭折 42

蜃気楼の国 45

神を見たか——ラディゲの死 54

鎖された夢 71

詩を書く少年 86

抒情的エスキス 89

鹿鳴館幻想 107

「十五歳詩集」の周辺 111

続「十五歳詩集」の周辺 130

間奏曲——輕井沢

154

「四季」・立原道造

159

抒情詩抄・花ざかりの森

172

続・抒情詩抄・花ざかりの森

189

浪漫への鑽仰——蓮田善明

207

英霊の声——散華の思想

217

うたの別れ——I 伊東静雄

226

うたの別れ——II 「文芸文化」

252

あとがき

265

装画・装幀
村上芳正

三島由紀夫少年詩

ことばの目覚め——出発

1

ことばは、常に稚い模倣からはじめられる。嬰兒のことばが母親のことばの模倣からはじめられるように。

ひとりの少年が、なぜ詩を書きはじめたか。なぜ書かねばならなかったのかということにさして深い詮索は無用であらう。

十二歳の平岡公威^{ひらおかきみたけ}、後の三島由紀夫は、たまたま学習院中等科に入学した際、「春草抄——初等科時代の思ひ出——」なる一文を「輔仁会雑誌」(第一五九号)に投じた。初等科時代、およそ彼の書く文章は教師の認めるところとは、ならなかったという。学校教育の作文の評価ほど当てにならぬものはない。文章の良否を判別するということは、評価者の主観に動かされやすく、その主観は評価者自身の教養や美意識に左右されるものだ。小学校、というよりもこの場合、

学習院初等科生、平岡公威の六年間の作文の点が決してよくなかったにしても、——三島由紀夫の研究家山口基の年譜に拠れば「初等科時代作文の点悪し」という一節がある——それは作家三島由紀夫の不名誉ではあるまい。今日においても小学校教師の文章評価力など、たかの知れたものであるし、学習院の初等科の教師といえどもその例外ではあるまい。

彼らにはなによりも文章を見る眼が欠けていた。己れの主体がないのである。まして、大正末期の作文教育は、ようやく自然主義の悪弊が初等教育にも浸透してきた時代である。「ありのまま」という利便な概念が文章作法にも横行していた。これは後に「綴り方教育」や、戦後の「生活詩教育」にも波及して今日に及んでいる。そういう価値観が厳然として支配している機構の中で、三島由紀夫——平岡公威少年の作文の評点がよかるうはずがない。

しかし、「春草抄」の一文は中等科の文学少年たちに小さな波紋を与えたことは確かだったのである。

由来、文学少年というものは、いつの時代でも生意気で、自己顯示欲ばかり強く、一種始末のおえない存在なのだが、美に対する直感だけは、そこいらのしたり顔の小学校教師などよりも、はるかに動物的に鋭いものだ。要するに、三島の「輔仁会雑誌」への第一作は、この文学志望の小生意気な少年どもの間に支持されたのであろう。それが同じように自己顯示欲の強い平岡公威という新入生に快い刺激を与えたに違いない。それは昭和十二年七月のことであった。

——だから、彼、平岡公威は次号に詩というものを書こうと決心する。賞讃への期待が詩を書かせる動機であつたとしても、卑しんではならぬ。むしろ、それは動機の純粹さといつてもいい。これは逆説ではない。

考える。形を作る。十二歳の少年にとっては、それは自己の発明に似ながら、造形という知的作業は模倣によつてはじめられた。

つまり、十二歳の少年の知識の中に、詩という概念がある。その概念をたどつて少年はまず、ことばで、その概念をなぞるのであつた。そのとき、ことば自体が模倣をはじめる。

2

紅い円盆のやうな陽が

緑の木と木の間

落ちかけてゐる。

今にも隠れて了ひさうで、

まだ出てゐる。

然し、

私が一寸後を向いて居たら、

いつの間にか、

燃え切つてゐて、

煙草の吸殻のやうに、

ぼつんと、

赤い色が残つてゐるだけだつた。

十二年八月

平岡公威「斜陽」(輔仁会雑誌)第一六〇号 昭十二・十二初出

少年は見えたものを詩に書いた。ことわっておくが、見たものをではない。見えたものをである。自然の情景をすっぱり切り抜いて詩のなかに収めた。「斜陽」はそういう詩である。

大正期、民衆詩派の詩人たちは詩作というものをその身辺に引きつけることで、日常そのものを詩にするという方法を普及させた。詩作は困難な言語の新しい文学的冒険や、個性のみが作りうる至難な芸術から、より多くの同時代の人びとも創作可能な感情の表出に適した文学のスタイルに変化した。現代風にいえば大衆参加を容易にしたとでもいっておこう。しかし、それゆえ、詩はとめどなく散文化し、無方法のなかで、詩が詩であることを急速に失っていった

とは、多くの詩史の説くところである。

しかし、この自由詩という、まことに軽便なスタイルは民衆詩派の時代が、とうに終焉しても、大衆の手のなかに確実に残されていた。

「斜陽」はそういう自由詩の流れをくむ一篇である。それは、同じ月に制作した「昼寝」という、ごく散文的な詩を読めば、ただちに解るであらう。

低い／＼垣が何処までも連なつてゐた。

小さな／＼児が垣に沿つて歩き出した。

毛虫に喰はれて穴の一杯明いた、

葉が落ちてきて子供の手をさすつた。

——それは、昼寝の夢だつた。

蟬が八釜しく啼いてゐる。

倭わさな人影が森へ入る路にさしかゝる。

蟬が八釜しく啼いてゐる。

森の中の沼地へ落ちた小さい石、

——それは昼寝の夢だった。

昭和十二年八月

「昼寝」(右同「輔仁会雑誌」初出)

「斜陽」と「昼寝」では、おそらく「斜陽」が制作過程のうえでは、先に書かれたと思われる。「斜陽」になかった修辭の意識のようなものが「昼寝」にはある。五行二連という詩形と、終行のリフレーションの使用などは、ごく初心者の常套的に用いる幼稚な詩法である。少年は過去の読書体験による記憶の残滓によって、こうした修辭が、より詩的に効果を読者に与えると感じていたであろう。たとえば、この「昼寝」の詩からは、けっして「詩と詩論」の運動の成果である新しい現代詩にはたどり着かない。しいていえば、百田宗治の詩集『かへり花』以後の詩にその類似を見出す。

「斜陽」が情景を切り抜いたものであるならば、「昼寝」はその情景のなかに、少年が自分自身の姿を採り入れた詩である。彼はまだ、明確に己れの謳おうとするものを発見していない。虫喰われた一枚のわくら葉。ほの暗い沼に投げこまれた小石の水音、その波紋。それらは白日の夢のなかの存在であるよりも、日常のなかの少年の心に与える、いいしれぬ感覚のおののきのようなものだ。己れの内なるものを歌ったというよりも、己れの概念にある詩を子供らしい

たんねんさでなぞって見せたというにすぎない。十二歳という年齢にそれ以上のものを要求するのは酷である。

ただ、この「昼寝」という詩篇の後半の詩的情感は、後年、三島の詩の訣れとなった詩篇「夜の蟬」において、もういちど再生している。蟬というなんの変哲もない昆虫が、その詩の六十篇の初めと終りにいちどずつ現われるという偶然の面白さだけは、読者は忘れずにいてもよい。ただし、そこになにかの意味を見出そうとするような解釈は無用というものだ。少年の心は常にかわりやすい。

しろがねの浜辺から

ピーチ・バラソルが消えるとき、

月夜の窓辺に、

蟋蟀こはらぎがなくなるとき、

緑色の単重ひとへを着てゐた野山が、

こがねのあはせに着更へるとき、

秋の蹺音あしおとが近づく。

寒がりの小鳥は、オレンヂの実る国へ、

暑がりは早や、火鉢恋しき帝都へ、

空は限なき洋を想はせ、

赤い櫂を有つ小舟が行き交ふ、

熟柿は、

悪漢の鴉に啄ばまれ、

百舌は、

其の下手なソプラノを張り上げる。

——秋たけなは。

十二年九月

「あき」(右同「輔仁会雑誌」初出)

「輔仁会雑誌」第一六〇号には平岡公威の署名で五篇の詩が掲載されている。

三島由紀夫の活字になって読むことのできる最初の詩篇である。「あき」は「寂秋」を並べて「秋二題」と題された連作詩の「一」なのである。五篇の詩がかならずしも制作月の順でなく配列されているのは、作者の詩に対する自己評価の結果と見るが、しかし、その巻頭の「あき」はなにほどのこともない。季節の推移を単純に詩にまとめたといった以外にこれとい